



## 先輩寄稿

### 城南高校の在校生の皆様へ贈る言葉

齋藤 満 宏（昭和三十八年卒）

城南高校の皆様、始めまして。私は昭和38年度卒の齋藤満宏と申します。昭和19年生まれで今年75歳を迎えます。

さて私は皆様や多分日本人の誰もが体験した事がないであろう事を、昭和48年4月から49年4月までの1年間に体験しましたので、その一部をお話ししたいと思ひ筆を取りました。その体験とは、昭和48年4月、ちょうど第4次中東戦争が勃発し、石油ショックが起こり、世の中が大混乱に陥った年のさなかに、小学生の頃から抱いていた世界中にはどんな国があり、どんな人々が暮らしているのか、どんな光景が広がっているのか見てみたいという思いを実現すべく、新婚旅行をかねて車で敢行したことです。殆ど野宿をしながら1年間を費やしました。その1年間の間に今生きているのが奇跡と思えるくらい何度も死ぬような目や危険な目に遭いました。

#### 1 英語について

私の父は、中学卒業後、郵政省のモールス信号の操打手として養成所に入り、後に中国に渡り新京という所で郵便局員として生活をしていました。私はそこで生まれました。敗戦により一家で日本に無一文で引き揚げました。その頃父は中国語を話すことはできたのですが、これからの英語の必要性を感じていたことから、毎朝5時になると私の枕元にラジオを置き、基礎英語を聞かせました。今でも講師の松本亨先生の発音がはっきりと耳に残っているほどです。お陰で英国では、*Your english is kings english.* と良くほめられました。とにかく中学入学時には、ごく普通の日常会話は話せました。そして話すことにますます興味が湧いていたので、中学1年から高校1年まで、当時徳島市内で唯一外国人牧師がいたキリスト教会に毎日

曜日、ミサに通いました。ミサの後の日曜学校で英会話を耳にするのが目的でした。3年も通うと家族同然の扱いをして頂き、3時にはお茶と自家製のお菓子をふるまってもらいました。その時出して頂いたアップルパイを食べて、世の中にこんなうまいお菓子があるのか、と驚きました。今でもアップルパイが好きでアチコチ出掛けたら買い求めますが、まだあの時の味に勝るパイに出会いません。ともかく、そういった英語の素地があったから、海外で会話に困った事は一度もありませんでした。まさに「継続は力なり」です。

## 2 報道の真偽

ここで伝えたい事は、マスメディアや政治家、その道のオーソリテイの言う事を100%信じるな、という事です。世の中の色々なニュースや報道が毎日山のように流れていますが、興味があると思ったら自分なりにその真偽を徹底的に調べるのだと思います。そう考えるようになったきっかけは外国為替でした。私は旅行に着手する2年以上前から事前準備として、あらゆる国の調査をしていました。その中の重要項目として為替レートがありました。当時の報道では1ドル360円、1ルーブル380円というものでした。実際にロシア入国の前に、入国時の見せ金としてスイスの銀行でルーブルをチャージしました。驚いたことに窓口でレートを見ると何と1ルーブル380円の公定レートを大幅に下回る90円、約4分の1の値うちだったのです。事前にスイスで約1万7千円をルーブルに交換しましたので、ロシア国

内では6万8千円分の金として利用できました。今でも為替レートは毎日新聞で見えますが、帰国以来ずっと円に対して同値か、いつも上回っているのはスイスフランとドイツマルクです。

## 3 世界の人々

世の中には人を見定めるのに、出自や姿形、学歴、地位、財力の多少ではなく、生身の人間の、今行なっている行動のみを見て正しく判断する人々が数多く存在するという事を身をもって知ったことです。

まず、インドデリーに着いて安宿を探していた時のことです。当時は西方(ヨーロッパ)から東方(インド・タイ・東南アジア・日本方面)を目指すヒッチハイカーや若者たちが毎日、安全な安宿やキャンプ場の情報を交換していたので、教えてもらったお札に、事前の調査で喜ばれると聞いていた日本のタバコと絵葉書をあげました。その時、スクーターに乗った日本のタバコと絵葉書をあげました。その時、スクーターに乗った夫婦が寄つて来て、案内してやろうと言うので、親切な人もいるものだと思いついて行き無事到着しました。当時のインドでスクーターに乗る



人は相当な収入のある方のはずでしたが、私がサンキューと言って中に入ろうとすると、タバコと絵葉書を求められたのは面食らいました。けれども良い教訓を得たと思えました。つまり、何も無いのに向こうから寄ってくる人間は警戒しろという教訓です。お陰で旅の中盤には、寄ってくる人間に危険な匂いがするの安全な匂いか、はつきりと見分けられるようになりました。

次いでパキスタンへ入国する為北部ルートを通ってミユリーナガルに立ち寄った時、この町には世界的に有名なルコルビジェの手になる政府庁があるので、その建物を見ようと車を降りて中に入りました。すると35歳前後の実直そうな青年が中を案内してくれ、今夜はこの建物の中で泊まりなさいと言うのでお言葉に甘えました。さらに自宅にも招いてくれ、その奥さんと共にもてなしをしてくれました。奥さんが突然ガラスの小瓶を見せて、これは日本の高い化粧品でメイコーと言いますが、もつたないのでまだ一度も使ってないんですよと切り出された時は、思わずその実直さとナイーブさに心が温かくなりました。パキスタンのベシヤワールでは、その町で最大の銀行の頭取の家に招待されました。一歩中に入るとそのスケールの大きさに圧倒されました。1〜2F吹き抜けの100坪はあるうかという家の中に入ると、この地のブルジョア階級と庶民とは、かくも隔たりがあるのかと、かえって戸惑いを感じました。家の外では乞食やその日暮らしの庶民がウヨウヨしているのに、家の中は別世界でした。

アフガン・カンダハールでは久保田鉄工が砂漠での農業用水

路の開発に参加していたのですが、2人の青年と知り合い大いに話が弾みました。当時は旅行者の間でそこは安全な宿泊所として有名な場所でした。鉄砲を持った警備員がいて、構内での車中泊は駐車料金だけで宿泊できました。クボタの青年から初めてオクラという野菜を頂きました。当時は日本では一般的に出回っていないなかつたので、中近東が原産地だろうと推測し、刻んだだけで醤油をかけて食べました。

トルコ北部トラブゾンという町では、工業高校の校長先生が一晩校舎で寝泊まりすることを許可してくれました。その夜、黒海沿いの漁港を見に行き、イワシの類ばかりの天ぷらを久しぶりに頂きました。

ヨーロッパに入ると、我々に興味を示してくれる人が増え、車で旅をする多くの人にも出会いました。オランダでは、道中出会った唯一の新婚さんトニー夫妻に是非立ち寄つてと言われお世話になりました。トニーの母親も我々に興味のある話題を次々と投げかけられました。お礼に妻が夕食に鳥の照り焼きを作らせてもらいますので鶏肉を2kg用意してほしいとお願いすると、我々は一度にそんなに食べられないと言われたのには驚きました。彼らは食べる量までいつも頭に描いているのかと



感嘆しきりでした。ともあれ、照り焼きは非常においしいと好評でした。

続いてドイツキールの町での事、市内観光を終えて駐車場に帰ってみるとウィンドーのワイパーに紙切れがはさんであり、今晚泊まると書かれていました。その方の家に伺うと旦那さんはキール大学の教授、奥様は元NHKのドイツ語の講師でした。共に身長180センチくらいの似合いの、典型的なドイツ風インテリジェンスを漂わせる二人でした。30畳はあろうかという居間の中央に四ツ足の付いた真白で大きなバスタブが置いてあり、湯につかりなさいと言うので戸惑いました。床には分厚いじゅうたん、仕切りのカーテンもないけれど、何事にも挑戦するのが我々のモットーでしたので、昔見た洋画を思い起こしながらシャボンで泡立てて湯をこぼさぬよう入りました。

ヨーロッパで感じた事の一つに我々に興味を示したのは殆どがドイツ語系の人々、つまりゲルマン系の人が多かったという事でした。

次はソ連からフィンランドに抜ける国境での出来事です。もうすぐ国境の検問所という地点で路肩に駐車しようとして、斜面に前輪を突っ込んで動きがとれなくなつた時、荷馬車に乗つた農民らしき4人組が何も言葉を交わさないうちから、ロープを取り出し路面へ引っ張り上げてくれました。黙って困つた人の為にするという無償の精神を目の当たりにし、ロシア国内で感じた息苦しい空気と違って、とてもさわやかな気分になりました。彼らはソ連邦が崩壊して独立国家エストニア他バルト3国になった今では、きつと様々な分野で活躍している事でしょ

う。彼らもまたドイツ語系のゲルマン民族だったのでしょ。

フィンランドに入国すると、まるで日本に帰つたような気分になりました。一党独裁の国から離れて、我々は自由だと叫びたくなるような気分でした。北欧3国では日本人と変わらぬ個性が随所に見受けられました。城南生の皆さん、将来海外に出られて結婚を考えるのなら北欧3国がおすすめでと思いますよ。

昭和48年12月31日。明日はスペインからフェリーでジブラルタル海峡を渡つてモロッコに渡るという日でした。マラガという保養地でキャンプを張っている隣に、スイスの銀行の頭取と日本人の男性のカップルがいました。共に50〜60歳くらいの2人で、いわゆる「88」でした。隣同士のテントで日本人もいる事だしと、妻が年越しソバならぬ年越しうどんをふるまつて、大層喜んでもらい、思い出に残る昭和49年の暮開けとなりました。翌朝はジブラルタル海峡のはるか彼方にモロッコ・タングジュールの山々がうつつすらとかすんでいるのを見て、まだまだ旅半ばだと気分を一新した正月になりました。

#### 4 終わりに

昭和49年4月、無事に妻と共に日本に帰国しました。旅行に際しての事前準備や調査の必要性や、今生きているのが不思議なほどの目に遭いながらも、それを克服してきた事など、まだまだお話ししたいことはありますが、また機会があれば書きたいと思っています。